

4. 学会発表

4. 1. 国内学会

1. 山口留亜, 松尾 篤
動画版感情読み取りテスト (VERT) の開発と年代別正答率の比較
第 31 回感情心理学会. 2023 年 5 月 @ 愛媛
動画版感情読み取りテスト (VERT) を開発し, その信頼性・妥当性を検証した. また, VERT の男女別正答率の比較を行ないテストの有用性を検証した.
2. 藤井 廉, 今井亮太, 重藤隼人, 田中慎一郎, 森岡 周
腰痛のない就労者が抱く潜在的な運動恐怖は腰部の保護行動に関与する: 作業関連動作の運動学的分析
第 27 回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会. 2023 年 6 月 @ 名古屋
腰痛のない就労者を対象に, 潜在的な運動恐怖と運動学的計測を実施した. その結果, 腰痛がなくとも腰痛に関連した動作に恐怖を有する者が存在しており, 恐怖を有する者ほど腰部の保護行動を呈することを明らかにした.
3. 古賀優之, 重藤隼人, 田中 陽一, 平川 善之, 森岡 周
運動器疼痛患者の臨床転帰・痛みと中枢感作症状の重症度の特徴から-
第 27 回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会. 2023 年 6 月 @ 名古屋
運動器疼痛患者において, 中枢感作症状と痛みがいずれも重症のグループは痛みが遷延化しやすいことがわかった. また, 痛みが軽度でも中枢感作症状高値の場合は, 一部が重症群に移行することがわかった.
4. 田中陽一, 藤井 廉, 重藤隼人, 佐藤剛介, 森岡 周
疼痛律動性評価の短縮は可能か? -地域在住の慢性疼痛患者を対象に-
第 27 回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会. 2023 年 6 月 @ 名古屋
慢性疼痛患者を対象に, 従来の 7 日間評価と比較し 3 日間評価による疼痛律動性の妥当性を検証した. その結果, 金曜 - 日曜までの 3 日間において実質的に 7 日間評価と一致しているとみなされる高いカッパ係数が得られ, 疼痛律動性評価の短縮が可能と推察できた.
5. 藤田大輝, 中村潤二, 塩崎智之, 生野公貴
側頭骨骨折により内耳障害を呈した症例に対する前庭リハビリテーションの経時的変化
第 2 回日本前庭理学療法研究会学術集会. 2023 年 6 月 @ 熊本
側頭骨骨折によりめまい及びふらつきの訴えのある症例に対して前庭リハビリテーション介入を行い, 前庭機能及び姿勢制御能力の評価を経時的に実施した. 前庭機能の代償機能及び habituation により, 自覚的なめまい感及び立位姿勢制御の改善を認めた.

6. 南川勇二, 西 祐樹, 生野公貴, 森岡 周
回復期脳卒中患者の運動麻痺と上肢活動量の回復過程の関係性
第 43 回近畿作業療法学会. 2023 年 6 月@奈良
回復期脳卒中患者の日常生活における上肢活動を加速度計で定量化し, サブグループ化し, それぞれの回復過程の違いをみた. その結果, 運動麻痺が改善しても, 上肢活動の非対称性を認める症例群と, 対称性に近づく症例群が存在し, 異なる回復過程を明らかにした.
7. 成田 雅, 坂野康介, 中城雄一, 森若文雄, 濱田晋輔, 岡田洋平
パーキンソン病患者のベッド上動作の左右差とその関連要因に関する横断的観察研究
第 17 回パーキンソン病・運動障害疾患カンファレンス. 2023 年 7 月@大阪
パーキンソン病 (PD) 患者のベッド上動作の障害の左右差とその関連要因について検証し, 寝返り動作や寝転がり動作では左右差を認める傾向を認め利き手と疾患優位側が影響していることが明らかになった. 起き上がり動作では左右非対称性が少ない動作パターンで実施している可能性が示唆された.
8. 浦上英之, 二階堂泰隆, 奥田悠太, 菊地 豊, 佐浦隆一, 岡田洋平
すくみ足があるパーキンソン病患者の転倒の有無を識別する歩行パラメータの検証
第 17 回パーキンソン病・運動障害疾患カンファレンス. 2023 年 7 月@大阪
すくみ足があるパーキンソン病患者を対象に, 過去 6 カ月以内の転倒の有無を識別する歩行パラメータを検証した. 結果, 身体質量中心の側方速度の低下や歩行率の増加が転倒リスクに関係する歩行パラメータであることが示された.
9. 岩井将修, 平川雄一, 岡田洋平, 直井佑生, 中野友裕, 本谷郁雄, 武田和也, 小山総市朗, 田辺茂雄, 櫻井宏明, 金田義清, 河村信利, 河村真実
第 17 回パーキンソン病・運動障害疾患カンファレンス. 2023 年 7 月@大阪
パーキンソン病認知機能低下者に対する LSVTBIG の介入が運動機能, 症状および日常生活動作に与える影響
認知機能が低下したパーキンソン病 (PD) 患者に対し, LSVTBIG の介入による運動機能・症状および ADL 動作の改善に与える影響を検証した. 結果, 運動機能・運動症状 ADL 動作能力が有意に改善された.
10. 山口留亜, 松尾 篤
動画版感情読み取りテスト (VERT) の作成と男女別正答率の比較
第 35 回大阪府理学療法学会. 2023 年 7 月@大阪
動画版感情読み取りテスト (VERT) の信頼性・妥当性を検証し, 男女別正答率の比較を含めてテストの有用性を評価した.

12. 乾 康浩, 森岡 周
脳卒中患者における不整地歩行戦略の経時的変化
第 17 回 Motor Control 研究会. 2023 年 8 月@東京
脳卒中患者が 10m の不整地を 4 往復した際の生体力学的パラメータと下肢および体幹の筋活動を計測し, 1 往復目からの経時的変化を調査した. 結果として, 歩行速度や筋活動は変化しなかったが, 立脚期の膝関節伸展角度や左右の安定性が 3~4 往復にかけて増加することが明らかとなった.
13. 大住倫弘
脳波データを活用した痛みの計測
第 7 回 基礎理学療法学会若手研究者ネットワークシンポジウム
2023 年 8 月@仙台
症例が訴える痛みを定量的に表現するような脳波データを探索的に分析して, その分析経過を報告した.
14. 松田総一郎, 浦上慎司, 井川祐樹, 壹岐伸弥, 大住倫弘
脳卒中後疼痛と痛みの性質の関連性は経過期間によって異なる
第 2 回日本老年療学会学術大会. 2023 年 9 月@奄美
脳卒中後初期の痛みは筋緊張の亢進に伴う筋骨格系疼痛の影響が強く, 12 週後の痛みは圧迫されるような痛みやしびれといった痛みが脳卒中後疼痛の慢性化につながることを示した.
15. 森岡 周, 深作哲貴, 林田一輝, 磯村隆倫, 乾 康浩, 温 文
高齢者における行為主体感の変容に関わる因子の探索; 心理物理的測定法を用いて
第 2 回日本老年療学会学術大会. 2023 年 9 月@奄美
後期高齢者と健康な若年成人を対象にドットの動きを自己制御できるかどうかを調査し, その結果, 要介護高齢者の主体感が低く, 行動が自分自身によるものかどうかの判別が曖昧になる可能性が示唆された. さらに, 高齢者では意志に基づく動的な行動の減少が主体感の変容に関与している可能性が推測された.
16. 乾 康浩, 水田直道, 藤井慎太郎, 寺澤雄太, 西 祐樹, 森岡 周
脳卒中患者の不整地歩行の特徴-歩行速度変化による分類-
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
脳卒中患者が平地と不整地を歩行した際の不整地での歩行速度の低下により維持群と低下群に分類し, その生体力学的パラメータと下肢筋活動の特徴を調査した. 結果として, 低下群は安定性低下, TLA 低下, 遊脚期膝関節屈曲不足, ヒラメ筋の活動を高められないという特徴を持つことが明らかとなった.

18. 本川剛志, 森岡 周
急性期 Wallenberg 症候群患者の歩行獲得に影響を及ぼす要因
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
急性期 Wallenberg 症候群患者の歩行自立度に与える臨床症状の影響を明らかにすることを目的として後方視的に調査を行った.結果として,急性期から歩行獲得している群は発症から立位獲得までの日数,嘔気の有無,年齢が影響していた.
19. 佐藤悠樹, 蓮井成仁, 大西 空, 田口潤智, 中谷 知生, 森岡 周
Effects of γ -wave transcranial alternate current electrical stimulation to the cerebellum on standing posture control -a preliminary study-
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
健常者を対象に, 小脳への γ 波(50Hz)の経頭蓋交流電気刺激が立位重心動揺に与える影響を異なる立位条件で検証した. 開眼ラバーおよび閉眼ラバー条件では刺激前の外周面積が大きい被験者ほど, 刺激後に外周面積が減少する傾向を認め, その効果には個人差や立位条件が関連する可能性があることが示唆された.
20. 藤井慎太郎, 成田 雅, 武田賢太, 生野公貴, 森岡 周, 河島則天
パーキンソン病患者における立位姿勢制御分析—身体重心動揺と筋活動の関連性に着目して—
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
パーキンソン病 (PD) 患者の姿勢制御特性を明らかにするため, CoP 特性に加えて, CoM と下腿筋活動の関連性を検討した. 深度カメラでの立位姿勢計測にて PD 患者特有の屈曲姿勢を定量的に把握できた. また, 疾患重症度が高いほど姿勢制御機能が低下することが示唆された.
21. 赤口 諒, 武田賢太, 田中幸平, 大石裕也, 奥埜博之, 森岡 周, 河島則天
振動を用いた接触タイミング知覚生起が脳卒中後感覚障害症例の把持力調節に及ぼす影響
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
感覚障害を伴う脳卒中患者を対象に振動による接触タイミングの知覚生起を与える介入を行うことで, 物体の把持力調節にどのような影響を及ぼすか検討した. 予測制御は感覚障害や運動失調の有無に関わらず改善することを示した. 出力制御は介入前後で有意差を認めなかったが, その変化率は運動失調の重症度に伴い減少する傾向を示した.
22. 林田一輝, 西 祐樹, 森岡 周
歩行中の自己観察視点の違いが感覚運動不一致の検出感度に及ぼす影響
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
健常者を対象に自己観察視点の違いに着目し, 歩行中の不一致検出感度, 異常知覚, 運動学的特性に与える影響を検証した. 自己観察視点の違いによって, 各パラメータの結果が異なることが示唆された.

24. 三枝信吾, 尾川達也, 南川勇二, 島田真一, 森岡 周
歩行能力向上が脳卒中患者のアイデンティティに与える影響：事例研究からの示唆
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
歩行能力向上に伴い, 本事例が重要視する歩行要素が自立性, バランス, 歩行距離と変化した. 歩行に介助や見守りが必要な時期には基本的欲求や対他的同一性といった人として共通の価値観が重要視され, 歩行自立後には生活歴に基づく特異的な価値観が重要視された. 歩行能力向上に伴い, 歩行に関する思考が変動することが示唆された.
25. 植田耕造, 早瀬裕之, 北川拳士, 高尾茉侑, 坊慎太郎, 岡田洋平, 森岡 周
脳卒中患者における自覚的姿勢垂直位あるいは自覚的視性垂直位の変動性の把握と特徴
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
脳卒中患者の自覚的姿勢垂直位と自覚的視性垂直位の変動性の関連や, どちらか一方の変動性のみ大きい群が存在するかを調べた. 変動性同士の相関はないことや, 自覚的姿勢垂直位のみ変動性が大きい症例は体幹機能障害を呈している者が多いことを示した.
26. 町野 豊, 植田耕造, 中西康二, 森岡 周
静止立位中の随意的制御と自動的制御による姿勢動揺の変化における視覚情報の影響の違い
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
静止立位中の随意的制御と自動的制御における視覚情報の影響の違いを明らかにすることを目的とし, その結果, 視覚情報の影響は少ないことが示された.
27. 安村広之, 高芝 潤, 渡邊家泰, 森岡 周
脳卒中片麻痺患者の歩行における時間的左右対称性に関わる因子
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
69 人の回復期脳卒中片麻痺患者を対象に, 身体機能や歩容の観点から左右対称性の改善に関する因子を調査した結果, 反対側への体幹側方移動や歩容が対称性改善に関連していることが示された.
28. 加藤晴大, 岡本涼太郎, 大西 空, 田口潤智, 中谷知生, 森岡 周
側頭頭頂接合部への経頭蓋直流刺激が静止立位および歩行の動揺に及ぼす影響
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
自覚的視性垂直軸 (SVV) に偏りがあった脳卒中患者に対して, TPJ (側頭頭頂接合部) への tDCS を併用した理学療法が歩行の安定性にも影響を与える可能性があることを示唆した.

30. 今井大樹, 山田 良, 淵上 健, 森岡 周
筋活動パターンの定量的評価によるトレッドミル歩行練習の脳卒中患者への適用と効果
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
脳卒中患者を対象にトレッドミル歩行を実施し, 規則的な運動環境を設定することで筋活動パターンが是正された. 特に同時収縮を減少させることで歩行効率が改善され, 歩行持久力が向上した.
31. 深作哲貴, 林田一輝, 乾 康浩, 磯村隆倫, 温 文, 森岡 周
意図に基づく活動量が高齢者の運動主体感に関連するか?
意図に基づく活動量の減少が, 運動主体感の低下に関連すると仮説を立て調査した. その結果, 高齢者において座位行動時間と主体感の間に関係がみられた.
32. 大西 空, 水田直道, 蓮井成仁, 佐藤悠樹, 田口潤智, 中谷知生, 森岡 周
運動麻痺重症例における歩行能力および下肢運動機能回復と非損傷半球を起源とした皮質脊髄路興奮性の関係
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
脳卒中患者を対象に, 経頭蓋直流電気刺激を用いて皮質脊髄路の興奮性を変調させることで, 非損傷半球の皮質脊髄路の興奮性は運動麻痺重症例の下肢運動機能回復と関係する可能性があることを示した.
33. 福田映美, 大西 空, 蓮井成仁, 田口潤智, 中谷知生, 森岡 周
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
補足運動野への経頭蓋直流電気刺激が視床出血症例の歩行の安定性および規則性に及ぼす効果; 症例研究
視床損傷患者に対する補足運動野 (SMA) への tDCS が歩行の安定性や規則性を改善させる可能性が示唆された.
34. 堀めぐみ, 蓮井成仁, 大西 空, 中谷知生, 田口潤智, 森岡 周
上肢の振りと経頭蓋直流電気刺激の介入効果: 脳卒中患者の歩行速度と安定性への影響
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
麻痺側上肢の振りを促すことで, 前方推進力が増大したことから歩行速度向上に至った. また, 歩行速度は下腿筋活動および TLA に時間的関連性があることが示唆され, 一次運動野への tDCS が遊脚期における下腿筋の同時収縮を改善させ, 歩行の安定性向上に寄与した.

36. 早瀬裕之, 植田耕造, 北川拳士, 高尾茉侑, 坊慎太郎, 岡田洋平, 森岡 周
自覚的姿勢垂直位評価における検者内・間の信頼性-脳卒中患者を対象とした研究-
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
30 名の亜急性期の脳卒中患者を対象に自覚的姿勢垂直位 (SPV) を測定した結果, 検者内信頼性は中程度であり, 検者間信頼性はかなり高い一致度を示した.
37. 前原寛潔, 淵上 健, 森岡 周
脳卒中後 Body Lateropulsion を呈した症例に対する直流前庭電気刺激と運動療法の併用の試み
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
Lateropulsion を有した症例に対して直流前庭電気刺激 (GVS) と運動療法を 1 週間併用し, その結果, 病棟生活への歩行が改善された.
38. 門脇一弘, 安村広之, 西森知佐, 高芝 潤, 森岡 周
左半側空間無視患者に対する入院早期からの視覚探索課題の効果 -症例報告-
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
左半側空間無視 (USN) を持つ患者に対して視覚探索課題を実施し, その結果, 入院早期からの視覚探索課題の導入は, 左方向への注意向上と ADL の改善に役立つことを示唆した.
39. 信迫悟志, 中井昭夫, 森岡 周
7-10 歳児における運動イメージと微細運動技能との関係
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
7-10 歳の定型発達児が, Hand Laterality Recognition 課題において, 運動イメージを使用することが出来ること, そして運動イメージの正答率と両手協調運動技能との間には有意な相関関係があることを示した.
40. 奥田悠太, 岡田洋平, 浦上英之, 二階堂泰隆, 菊地 豊
脊髄小脳変性症患者の前方歩行安定性とその代償戦略
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
脊髄小脳変性症患者は歩行周期を通して, 前方の動的安定性を高く保つ代償戦略をとることを明らかにした. また, 脊髄小脳変性症患者は, バランス能力が低下し, 歩行時の動的安定性を高く保つ傾向が強い者ほど, 足接地後に対側肢の踵離地が生じる傾向が強いことも明らかにした.

42. 藤田大輝, 生野公貴, 岡田洋平
健常若年者の頭部傾斜時の垂直認識と様々な感覚条件での立位姿勢制御能力との関係
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
健常若年者を対象に従来の自覚的視性垂直位の結果は立位姿勢の足圧中心の量的指標と関連し, 頭部傾斜時の自覚的視性垂直位の結果は静止立位の足圧中心の動揺速度や周波数などの質的指標と関連する可能性があることを示した.
43. 中村潤二, 西前拓馬, 内沢秀和, 辻本直秀, 生野公貴, 塩崎智之, 岡田洋平, 庄本康治
Body lateropulsion 症例への感覚情報の再重みづけを用いた姿勢制御練習が姿勢制御や前庭脊髄路に及ぼす影響
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
Body lateropulsion(BL)一症例において, BL 側の外側前庭脊髄路興奮性が低下することを初めて報告した. また, 同症例に対して 2 種類の異なる感覚条件に重みをおいた姿勢制御練習を実施し, 体性感覚に重みづけを置いて練習を行うことにより, 体性感覚や前庭感覚への依存度が高い条件における立位姿勢制御が改善することも合わせて報告した.
44. 成田 雅, 坂野康介, 中城雄一, 森若文雄, 濱田晋輔, 岡田洋平
パーキンソン病のベッド上動作の自立に関連する要因の検討
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
パーキンソン病患者を対象に, 寝返り, 起き上がり, 寝転がりなどのベッド上動作の自立度の関連要因についての横断的調査研究を比較的大きな規模で実施し, 共通する項目として体軸症状が関連すること, また各動作に特異的な関連要因があることについても報告した.
45. 木下 栞, 大住倫弘
腕神経叢損傷症例と健常者における Mirror Visual Feedback 中の脳一筋コヒーレンスの違い
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
腕神経叢損傷症例 1 例と健常者 12 名における MVF 中の脳一筋コヒーレンスを比較検討し, 腕神経叢損傷症例においては MVF によって対側感覚運動領域における β 帯域コヒーレンスが増加する一方で, 健常者においては MVF によって β 帯域コヒーレンスが低下することを報告した.
46. 松田総一郎, 浦上慎司, 内沢秀和, 井川祐樹, 壹岐伸弥, 大住倫弘
脳卒中後患者におけるサーマルグリル錯覚の臨床的特徴と病変部位の分析
第 21 回日本神経理学療法学会学術大会. 2023 年 9 月@神奈川
脳卒中後患者において, サーマルグリル錯覚によって生じる痛み・不快感と Bedside QST のワインドアップ比の関連性は高く, 視床と頭頂葉病変がサーマルグリル錯覚による不快感と関連することを示した.

48. 大住倫弘, 猪俣一則, 岡田 敦, 井上裕治
自宅でのデジタルミラーセラピーは幻肢痛を緩和させる
第 39 回日本義肢装具学会学術大会. 2023 年 10 月@岡山
自宅です毎日実施することのできるデジタルミラーセラピーを開発し, 幻肢痛を有する症例 1 名を対象にシングルケースデザイン (A-B-A method) でその効果を検証した. その結果, デジタルミラーセラピーを実施した期間のほうが, 実施しなかった期間よりも有意に痛みが軽度であった.
49. 田中智哉, 林田一輝, 藤井廉, 重藤隼人, 産屋敷真大, 森岡 周
人工膝関節置換術後の身体性と疼痛の時系列分析—Cross-Lag Correlation Analysis によるケースシリーズ研究—
第 11 回日本運動器理学療法学会学術大会. 2023 年 10 月@福岡
人工膝関節置換術後患者 5 名の主観的な身体性と疼痛強度を 3 週間毎日評価し, その関係性を Cross-Lag Correlation Analysis を用いて明らかにした. その結果, 患者 3/5 名において有意な相関関係を認め, それらの関係性には個別性があることがわかった.
50. 信迫悟志, 大住倫弘, 中井昭夫, 森岡 周
定型発達児における bimanual coupling 効果と微細運動技能との関係
第 10 回日本小児理学療法学会学術大会. 2023 年 10 月@小樽
6-13 歳児において Bimanual coupling (BC) 効果が生じることが確認され, BC 効果の減少 (=両手を同時に別々に操作する能力の向上) と両手協調運動技能の向上との間には有意な相関関係があることを示した.
51. 浅野大喜, 武田真樹, 阿部広和, 儀間裕貴, 信迫悟志
脳性麻痺児の抑うつ傾向の調査—多施設共同研究
第 10 回日本小児理学療法学会学術大会. 2023 年 10 月@小樽
CP 児では抑うつのレベルが高い傾向にあり, 普段の活動に対する楽しみの減衰に関連しており, また抑うつ傾向の高さには, CP の存在だけでなく, 行為の問題が関連していることが明らかとなった.
52. 南川勇二, 西祐樹, 生野公貴, 森岡 周
回復期脳卒中患者の上肢活動とそれに関わる要因
第 57 回日本作業療法学会. 2023 年 11 月@沖縄
回復期脳卒中患者の日常生活における上肢活動を加速度計で定量化し, サブグループ化した. その結果, 上肢運動麻痺が軽度であるにも関わらず日常生活の上肢活動で非対称な群の存在が明らかとなった. さらに決定木分析を用いて, 各サブグループに関わる要因が抽出された.
53. 福西知史, 信迫悟志
算数障害リスク児における生得的数覚
第 57 回日本作業療法学会. 2023 年 11 月@沖縄
7-12 歳の算数障害リスク児 10 名と年齢を揃えた定型発達児 10 名に 2 種類の生得的数覚 (サビタイジング, 量の弁別) 課題を実施し, 比較検討した. その結果, 算数障害リスク児ではサビタイジング能力が低下していることが示された.

54. 大住倫弘, 生野公貴, 高村優作, 河島則天
触覚アロディニアに特徴づけられる脳波成分の分析
日本臨床神経生理学会第 53 回学術大会. 2023 年 12 月 @福岡
健常者複数名と触覚アロディニアを有する症例 1 名を対象に, 痛みを有する部位を柔らかいブラシで刺激し, その時の脳波を記録した. その結果, 触覚アロディニア患者の脳波に特徴的な成分が観察された.
55. 佐藤悠樹, 寺澤雄太, 植田耕造, 蓮井成仁, 大西 空, 森岡 周
小脳への経頭蓋直流電気刺激が脊髄運動ニューロンおよび前庭脊髄路の興奮性に及ぼす影響
第 28 回日本基礎理学療法学会学術大会. 2023 年 12 月 @広島
小脳への経頭蓋直流電気刺激(tDCS)が脊髄運動ニューロンおよび前庭脊髄路の興奮性に及ぼす影響を検証した. 偽刺激, 陽極刺激, 陰極刺激の 3 条件で脊髄運動ニューロンおよび前庭脊髄路の興奮性に変化は見られず, 小脳への tDCS はこれらの興奮性には影響を与えない可能性が示唆された.
56. 田中智哉, 林田一輝, 藤井廉, 重藤隼人, 柴田秀稔, 田中宏典, 産屋敷真大, 神谷阿久里, 森岡 周
痛覚変調性疼痛と神経障害性疼痛の混合性疼痛において身体知覚異常は特徴的となる
第 45 回日本疼痛学会 2023 年 12 月 @福島
膝疾患患者を対象に身体知覚異常が最も著明となる疼痛メカニズムを患者立脚型アウトカムを用いて検証した. その結果, 痛覚変調性疼痛と神経障害性疼痛の両方を有する場合, 身体知覚異常が著明となる可能性を明らかにした.
57. 田中智哉, 林田一輝, 藤井廉, 重藤隼人, 柴田秀稔, 田中宏典, 産屋敷真大, 神谷阿久里, 森岡 周
簡易的な質問によって筋骨格系疾患における身体性変容をスクリーニングできるか?
第 63 回近畿理学療法学会学術大会 2024 年 2 月 @滋賀
筋骨格系膝疾患患者を対象に, 自分の膝は自分の体の一部であると感じる (身体所有感) と自分の膝は思い通りに動いてくれる (運動主体感) の二項目の質問は身体性変容のスクリーニングに有用である可能性を明らかにした.

59. 海藤公太郎, 藤井 廉, 西 祐樹, 森岡 周
運動恐怖が体幹屈曲伸展動作の運動学的指標に与える影響～痛み恐怖条件付けパラダイムを用いた検証～
第 28 回日本基礎理学療法学会 2023 年 12 月 @ 広島
健康成人 17 名に痛み恐怖条件付けパラダイムを用いて実験的に獲得した運動恐怖が体幹における運動学的指標に与える影響を検証した. その結果, 運動恐怖の獲得に伴い脊柱最大屈曲角度の減少と最大伸展角速度の増大する傾向を示した.
60. 海藤公太郎, 藤井 廉, 西 祐樹, 森岡 周
恐怖条件付けパラダイムを用いた体幹屈曲伸展動作における運動学的指標の変化の検証
第 45 回日本疼痛学会 2023 年 12 月 @ 福島
健康成人 24 名に痛み恐怖条件付けパラダイムを用いて実験的に獲得した運動恐怖が体幹における運動学的指標に与える影響を検証した. その結果, 運動恐怖の獲得に伴い脊柱最大屈曲角度の減少と最大伸展角速度の増大し, その差は統計学的に有意であったことを明らかにした.
61. 大西 空, 水田直道, 蓮井成仁, 佐藤悠樹, 田口 潤智, 中谷 知生, 森岡 周
脳卒中後運動麻痺重症例における下肢筋出力の調整力と非損傷側の皮質脊髄路興奮性の関係
第 28 回日本基礎理学療法学会 2023 年 12 月 @ 広島
脳卒中患者を対象に, 経頭蓋直流電気刺激を用いて皮質脊髄路の興奮性を変調させることで, 非損傷半球の皮質脊髄路の興奮性は運動麻痺軽症例の筋出力の調整力を低下させるが, 重症例においては関係しない可能性があることを示した.

4. 2. 国際学会

1. Inui Y, Morioka S
Factors associated with decreased gait speed on uneven surface in stroke patients.
European Stroke Organisation Conference 2023 @ Munchen
脳卒中患者の不整地での歩行速度低下に関連する要因を調査した. 結果として, 不整地で歩行速度が低下する脳卒中患者は運動麻痺が重度で大腿二頭筋の活動が低い者であることが明らかとなった.
2. Koga M, Iki S, Tanaka Y, Uragami S, Sato G, Osumi M, Morioka S
Characteristics of hemiplegic shoulder pain differ according to the extent of the pain site.
European Stroke Organisation Conference 2023 @ Munchen
脳卒中後の肩の痛みについて, 痛み部位が麻痺側上下肢まで広がっていると, 神

経障害性疼痛や破局的思考の要素が強く、痛み の性質では深部組織に由来する痛みや、しびれが強いことがわかった。

3. Hasui N, Mizuta N, Higa Y, Matsunaga A, Ohnishi S, Sato Y, Taguchi J, Nakatani T, Morioka S
Characteristics of gait in post-stroke patients during the rehabilitation process: a preliminary study using muscle synergy analysis
European Stroke Organisation Conference 2023 @ Munchen
脳卒中後症例において、歩行時のシナジー数と歩行速度が乖離する症例を特定した。特に、歩行速度が遅くてもシナジー数が 4 つと残存していれば、1 ヶ月後の歩行能力は改善しやすいことがわかった。
4. Osumi M, Inomata K, Inoue Y
Tele-VR rehabilitation alleviated phantom limb pain – Single case study using experimental designs –
RehabWeek 2023 @ Singapore
自宅でも仮想現実空間 (VR 空間) でミラーセラピーが実施できるシステムを開発し、幻肢痛を有する症例 1 名で Single-case experimental designs を計画した。その結果、最初の 1 週間ほどで幻肢の運動が改善し、その後に幻肢痛の緩和が観察された。
5. Sato Y, Hasui N, Ohnishi S, Taguchi J, Nakatani T, Morioka S
Effects of anodal tDCS on the cerebellum combined with physical therapy on sway in cerebellar ataxia patient: an ABA single case study
The 2nd International Symposium on Hyper-Adaptability@Kyoto
小脳失調患者に対する小脳への陽極 tDCS と理学療法の組み合わせが重心動揺に与える影響を検証した。その結果、閉眼立位の重心動揺が改善する傾向があり、特に前後方向の動揺に効果が大きい可能性が示された。
6. Kinoshita S, Osumi M
Mirror Visual Feedback Modulate CorticoMuscular Coherence -Case series-
The 2nd International Symposium on Hyper-Adaptability@Kyoto
腕神経叢損傷後の痛みを有する 2 症例における脳筋コヒーレンスが Mirror visual feedback によって修飾されるのかを検証し、その結果を報告した。
7. Onishi S, Morioka S
Relationship of the Corticospinal Tract in the Uninjured Hemisphere to Lower Limb Motor Function and Gait in Severe Stroke Patients
The 2nd International Symposium on Hyper-Adaptability@Kyoto
脳卒中片麻痺における歩行中の皮質脊髄路の活動と下肢運動機能との関係を調査し、その結果を報告した。